

ひよく 比翼の束 たばね 第六十三回

忘れかけていたこと

さきごろ読んだ雑誌に、とある小さな会社の社長が、新採職員に「親の足を洗う」という課題を与え、そしてその感想文を提出させた記事が掲載されていた。

親の足を洗うということは、現在の親子の関係ではどう考えていられないことであり、おそらく日常的にはありえないことであろう。

こどもは、自分の親になかなか言い出せず、困りに困ったが、しかし社長から与えられた課題をやらないわけに

はいかない。
仕方なく、母親にしか言い出せず、

思いきって切り出したそうである。
母親自身も、一体何を言うのかと驚き、とまどったとのことである。

母親の足を洗ったその感想文は、胸を打つものであった。

「洗っているうちに、母の足の裏がざらざらしていて、荒れている足を洗いながら、これまでどんな生活をしてきたのか、どんな思いで私を育ててくれたのか・・・」

思っていたよりも母の足が小さくて、こんなに小さな足で毎日私たちの生活を支え、育ててくれたのかと、最初は照れながらやっていた母の足洗いに、言葉では言いあらわすことのできない思いが込み上げてきた・・・」
とのことである。

その時の母親の言葉がどんなものであったのかが書いてありませんでした

が、母親の心中、それは想像に絶するものがあつたらうと思われます。

私はこの記事を読みながら、遠く過ぎ去ってしまった母へのさまざまない出が蘇ってきました。

母は80歳を過ぎたころから認知症が進行し、84歳で旅立った。

気丈な母であつたので、一日一日と自分を失っていく母の悲しみや苦しみが手に取るように感じられた。

あるとき母が「爪を切ってくれないか」と言ってきたことがある。

母の手の爪足の爪は、厳しかった野良仕事によって、とても固く、まがりくねっていたことをよく覚えていた。

視力もおとろえ、小さくなってしまった母の体を支えながら、爪を切つた。「体がらくになったようだよ！」と母が言った。

この手で、この足で必死に働き、私どもを育ててくれた母である。

もつともつと体が大きく見えたはず

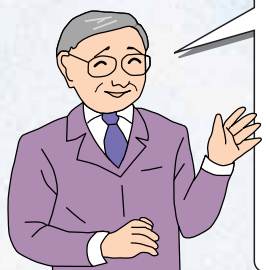
であつたが、認知症が進み、今にも消え去ってしまうように見える母の人生の終わりに、母と共に生活できることに何とも言いあらわすことのできない充実感を覚えた。

親子の絆、子育ての中で、日常生活の中でどのようにして築いていけばよいのだろうか。

殺伐とした親子関係、人としての心が失われてしまったような子どもや高齢者への虐待など、連日のように悲しい出来事が報道されている。

他人事としてすまされない思いがある。原点は、家庭教育が問われているのであろう。

私(市長)の思いや願いなどを市民の皆さんにお伝えします。



※タイトルの「比翼の束」とは、市民と行政を翼に例え、ふたつを束ねてまい進するさまをイメージしています。